

女性研究者が多く活躍する企業における採用と職場環境

Recruit and work environment in company where many female researchers are active

シチズン時計開発部 ○橋本信幸

Nobuyuki Hashimoto

E-mail: hashimotono@citizen.co.jp crystaloptics2@gmail.com

当社はその社名に見られるように市民に親しまれる時計造りからスタートした。また精密産業は伝統的に特に製造部門では女性が活躍し、当社のマイスターも女性である。その DNA は開発部門にも見られ、女性の研究者比率が高くまた様々なキャリアパスを持って活躍している。結果的にはすべての人にとって、働きやすく創造性を生みやすい環境につながっている。その環境と採用について報告する。

シチズン時計は一昨年、創業 100 周年を迎えた。スタートは尚工舎時計研究所であり、まさに物造りからスタートした企業である。その後 1930 年に現社名となった。私が入社したのは 1983 年で、現在の開発部である技術研究所に配属された。当時はスタッフを含めて 200 名程度の人員だったと記憶しているが、女性研究者は修士号を持つ一名であったと思う。同期にも女性の研究者はいなかった。しかしその 2 年後からは、ほぼ毎年のように研究所に女性研究者が採用されるようになっていた。

しばらくすると、女性研究者が普通に周りで活躍するようになっていった。今は状況が変わっているが、時計は老若男女の差なく身に着ける機会が多く宝飾品と関連することもあり、女性にとっては比較的イメージのよい業界であったと思う。その意味では、伝統的に女性の視点や活躍を期待する環境であった。実際、入社当時から女性が寿退社をする（当時は一般にそのように言われる時代だった）というような雰囲気はまったく感じられなかった。むしろ、継続して活躍を望む雰囲気があった。

数年ほど前までは、私も採用（技術二次面接）に関わっていた。応募者に対する女性の割合は高くはなかったが、実際の採用においては半数が女性であった。これは意識したわけではなく、人を見て当たり前採用したらそうなったと言ってよい。採用したいと思うアクティブな人材がたまたま女性だったとも言える。実際に社内で博士号（社会人）を取得するのも女性が多い。

我々の開発部門はハロウィンやジンギスカンパーティーなど、社内行事も多いのだがそこでも女性企画から積極的に関与している。仕事だけでなく老若男女が互いの個性を尊重しながら創造的活動をしている。そこから、会社の将来を支え社会に貢献できる製品や技術が生まれていく。